京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（1 年計画の 1 年目）

１．研究課題

歴史的メディア認識論：テレビ史におけるメディア論とテクノサイエンスの交錯

Historical Media Epistemology: The Technoscientific Formation of Television

２．研究代表者氏名

ショーン・ハンスン

HSIUNG, Hansun

３．研究期間

2023 年 4 月-2024 年 3 月(1 年目)

４．研究目的

本研究班の最大の目的は「歴史的メディア認識論」とでも呼ぶべき新たな学際的研究領域の輪郭を描き出すことである。特に本研究班が目指しているのは、バシュラール以来科学史研究の基礎となっている歴史的認識論を、キットラー以来のドイツ系メディア論と接続することであり、この連携を通してメディア・テクノロジーがいかに知識の保存、表象、運搬の可能性の条件をかたちづくってきたのかを明らかにすることである。この可能性を探究するため、本研究班はまずテレビを取り上げる。テレビは通常「マス」を対象とするメディアとして、カルチュラル・スタディーズや社会学といった分野で研究されてきたが、本研究班はこれとは対照的に、テレビを人間／ポスト人間の知覚・感覚の新たなモードを作り上げるテクノサイエンスという観点から検討する。この歴史において重要な役割を果たした視聴科学」という分野は、60 年代以降、生理学・心理学・神経科学・工学にまたがる学際的研究グループを組織し、人間と動物の知覚システムについての基礎科学的研究を行っていた。このような観点からテレビの検討を進めることで、本研究班はメディア論が科学史にとってもつ重要性と、テクノサイエンスがメディアにとってもつ重要性、すなわち歴史的メディア認識論の重要性を示す。

This research group seeks to outline an emerging interdisciplinary field which we call “historical media epistemology.” Specifically, we aim to form a rapport between historical epistemology in the history of science and new media studies since Kittler, using this to build theoretical models and practical tools for understanding how media technologies structure the storage, representation, and transmission of knowledge. In order to do so, the group focuses on on television. As a “mass” medium, television has been studied from the standpoint of cultural studies and sociology. In contrast, our goal is to examine television as a site for the

technoscientific construction of new modes of human and posthuman sensory perception. Key to this is the history of the field of "Auditory and VIsual Information Processing" and its research on the perceptual systems of humans and animals through a mixture of physiology, psychology, neuroscience, and engineering. By understanding television as a technoscience of perception, our group demonstrates the deep interconnection between media studies and the history of science.

５．本年度の研究実施状況

ショーン班は活動の中心として、日本とイギリスを結んでオンライン読書会を合計 7 回行い、メディア論・テレビ論の重要文献を講読した。また、これに加えて、対面でのイベントとして、6 月には日英バイリンガルでのワークショップ「Techniques of the Shichōsha: On the Technoscientific Formation of Cultural Subjects／〈視聴者〉の系譜：ある文化的主体の科学技術的形成」を、12 月には「テレビジョン・アーカイブスを再想像する：科学技術とメディア論から考える未来」の二つの公開イベントを行った。また、2 月にはクローズドでの研究報告会を開催した。

６．本年度の研究実施内容

2023-04-27 読書会 飯田豊（2016）『テレビが見世物だったころ：初期テレビジョンの考古学』青弓社 発表者 新藤雄介 福島大学

2023-05-30 読書会 Doron Galili, 2020, Seeing by Electricity: The Emergence of Television, 1878-1939, Duke University Press（Sign, Storage, Transmission）発表者 河村賢 大阪大学

2023-07-06 読書会 吉見俊哉『「声」の資本主義』（河出文庫） 発表者 岡澤康浩 人文科学研究所

2023-09-05 読書会 Henning Schmidgen『Horn, or The Counterside of Media』（University of Duke Press, 2022） 発表者 HSIUNG, Hansun Durham University

2023-10-24 読書会 Lorenz Engell. The Switch Image: Television Philosophy.（Bloomsbury Publishing, 2022）発表者 岡澤康浩 人文科学研究所

2023-12-04 テレビジョン・アーカイブスを再想像する 司会 岡澤康浩 人文科学研究所 〈テレビジョン〉的なものの複数性に開かれたアーカイブズへ 発表者 HSIUNG, Hansun Durham University NHK アーカイブスの保存と利活用 発表者 前川秀樹 NHK アーカイブス 発表者 山岸清之進 NHK アーカイブス 放送関連の歴史資料の現状～NHK 文研所蔵の文書資料を中心に～ 発表者 村上聖一 NHK 放送文化研究所 国立科学博物館のビジュアル系資料の保存と活用 発表者 前島正裕 国立科学博物館 技術史研究におけるモノ・知識・アーカイブ コメンテーター 河西棟馬 東京工業大学 アーカイブとメディア

研究を往還する コメンテーター 近藤和都 大妻女子大学

2023-12-18 読書会 丸山友美『日本の初期テレビドキュメンタリー史』(青弓社、2023) 発表者 岡澤康浩 人文科学研究所

2024-01-29 読書会 Susan Murray, 2018, Bright Signals: A History of Color Television, Duke University Press 発表者 河村賢 大阪大学

2024-02-12 研究報告会 All the Sciences Under One Roof: Shimomura Toratarō's War on "Japanese Science" 発表者 岡澤康浩 人文科学研究所 Reassembling the Written 発表者 HSIUNG, Hansun Durham University コメンテーター 中尾麻伊香 広島大学 日韓ビデオアート 発表者 KWON, Eugene Yale University / 早稲田大学 Media, (Sound) Technology, and Body 発表者 CHOI, Eun Jeong New York University / 東京大学 テロリズムとテレビ 発表者 河村賢 大阪大学

７．共同研究会に関連した公表実績

なし

８．研究班員

所内

岡澤康浩

学外

HSIUNG, Hansun(Durham University (UK))、河村賢(大阪大学社会技術共創研究センター)、河西棟馬(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院)、松山秀明(関西大学社会学部)、永田大輔(明星大学社会学部)、大尾侑子(東京経済大学コミュニケーション学部)、小川豊武(昭和女子大学人間社会学部) 、BRONSON, Adam(Durham University (UK))

9．共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
人文研所属	1	1	0	1	0	0	9	0	9	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内（人文研を除く）	2	4	0	0	0	2	10	0	0	0	4
（内女性）		(3)	(0)	(0)	(0)	(1)	(9)	(0)	(0)	(0)	(3)
国立大学	4	4	0	2	1	0	15	0	13	1	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(1)	(0)	(2)	(0)	(0)	(1)	(0)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学	5	5	0	2	1	0	11	0	7	2	0
（内女性）		(2)	(0)	(1)	(0)	(0)	(2)	(0)	(1)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関	3	4	0	0	0	0	4	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	4	4	0	1	3	0	15	0	9	3	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(2)	(0)	(2)	(0)	(0)	(2)	(0)
その他　※	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	19	22	0	6	5	2	64	0	38	6	4
		(9)	(0)	(1)	(3)	(1)	(15)	(0)	(1)	(3)	(3)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10．本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 博士学位を取得した学生の数
なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等
　出版社などはまだ未定であるものの、6 月に行った国際ワークショップの結果および読書会での議論を踏まえて、テレビについての論文集出版を計画している。